不純異性交遊児童の人格像

——バウムテストによる検討——

一谷　彊・山下真理子・津田　浩一・林　勝造・国吉　政一

A Study of Personality Characteristics of Girls who Have Illicit Heterosexual Relations With Special Reference to Tree-Drawing Expression in Koch's Baumtest

Tsuyoshi ICHITANI, Mariko YAMASHITA, Koichi TSUDA,
Katsuzo HAYASHI, and Masaichi KUNIYOSHI

Received September 30, 1982

問　　題

近年，女子性非行の低年齢化が進み，また，少年の強姦や猥せつ行為等の性非行が年次減少傾向を示しているのとは逆に，実数としてはむしろ増加傾向にあると言われている。このような問題の深刻化の原因・背景として，1977年青少年白書には，性解放の風潮，身体的早熟，その結果として，性に対する意識や関心を持ち始める年齢の低下，家庭，学校における生活指導，しつけの欠如，一部の低俗雑誌，映画などの誇張した興味本位の性情報の氾濫，性を商品化した営利主義の風潮等の要因があげられている。今回は女子性非行の中の不純異性交遊を取りあげ，上述のような社会環境や種々の問題・歪みを含む生活環境の中で，不純異性交遊児がどのように自己の環境を認知し，適応しようとしているのか，また，思春期の課題にどのように対処しているのかということを，バウムテスト (Baumtest: Koch, 1952) による一般児との比較を通して検討した。その際，できるだけ彼女たちの内面に立ち，その心理的環境を理解するように努めるとともに，彼女たちの人格特性や適応様式を養育環境および現時点での生活環境と関連づけながら考察した。

なお，"不純異性交遊" という用語は「不純な性交をし，又はそれを目的として時間的・場所的に不健全な交遊をする行為である」（警視庁「少年補導票の様式及び取扱い基準」）と定義されている。しかし，菊地（1981）も指摘するように，思春期の性衝動や彼女たちが置かれている性的モラトリアムの長期化，性に対する考え方の時代的変化からすると，単に性行為を従来の純潔主義から不純視することは不適切であると言える。そこで，菊地の述べるように，不純異性交遊を「すでに何らかの不適応現象が明らかに見られて，怠学や家出などと同様に不適応現象として性的な行為に出たり，既成社会の性道徳に挑戦する目的で乱交などという手段に出る純粋には性

的ではなく，単に現象として性的であるから問題視される」場合と見なすことが適切と考える。今回の対象となった不純異性交遊児も，そのほとんどの者が，不純異性交遊だけでなく，怠学，家出，万引，シンナー吸引等の問題行動を示している。

研　　究 I

目　　的

バウムテストに現われる種々のサインに基づき，人格特性や適応様式等について，不純異性交遊児と一般児との間の共通点および相違点を明らかにする。

対　　象

不純異性交遊児群（以下，「性非行群」と略記する）：大阪市，大阪府下，京都市に居住し，不純異性交遊の他，怠学，家出，万引，シンナー吸引等の問題行動により警察から児童相談所に通告された者，および家庭や学校から相談を持ち込まれた者。

一般群：大阪市内に居住する公立中学校の生徒（特に問題行動のみられないもの）。

対象数は次のとおりである。

性非行群：中学２年生27名，３年生25名，合計52名。
一　般　群：中学２年生31名，３年生29名，合計60名。
} いずれも女子のみ。

方　　法

バウムテストを，性非行群には処遇決定前に他の心理検査とともに個別法で，一般群には学級単位の集団法で実施した。実施期間は，性非行群が昭和44年～56年，一般群が昭和41年である。バウムテストに現われた種々のサインを，国吉・林・一谷・津田・斉藤（1980）の作成による『バウムテスト整理表』の項目に準拠して拾い上げ，その出現率を両群について求め，有意差を検定した。なお，１人が２～３枚ずつ描いている場合は，表現が最も豊かであると思われる１枚を選択した。

結　　果

両群における項目の出現率および検定結果は表１〔表1-(1)から表1-(7)まで〕のとおりである。本研究では出現率の高低が重要であると考えたので，表は，それがよくわかるように，整理表の項目順序を出現率の高い順序にして並べ変えた。また，両群の出現率に有意差のみられた項目のうち，解釈上，重要と思われる項目を別表にして表２〔表2-(1)から表2-(4)まで〕に示した。

まず，両群の共通点として，「左右への傾向や傾斜なし」，「風景・附属物なし」，「地平線なし」，「根なし」，「幹の太さ―普通」（以上，70％以上の出現率，表1-(1)），「幹の位置（X軸）―中」，「幹輪郭―直線（線）」，「全上向枝」（以上，50～60％の出現率，表1-(2)），「冠・幹の強調なし」，「広い基部および普通の基部」，「枝の数―４本以上」，「管状枝」，「尖状枝」（以上，30～40％の出現率，表1-(1)(2)）が主な項目としてあげられる。他にも，出現率が30％以下の項目も含めると，20以上の項目で共通性が確認された。なかでも，出現率が両群とも10％未満の項目

表1　性非行群と一般群のバウムテストにおける項目の出現率

表1-(1)　出現率が両群とも60%以上の項目

	項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
全体的見所	XI 左右への傾向なし	51	98.1	55	91.7	
	XII 左右への傾斜なし	40	76.9	44	73.3	
景および風お附属物	風景・附属物なし	49	94.2	57	95.0	
地平	I 地平線なし	44	84.6	47	78.3	
根	I 根なし	38	73.1	45	75.0	
幹	I 二線幹（断線なし）	44	84.6	40	66.7	**
	V 幹の太さ——普通	40	76.9	42	70.0	

** $P < .05$

表1-(2)　出現率が両群とも30%以上の項目

	項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
全体的見所	IV 冠・幹の強調なし	22	42.3	26	43.3	
	X 左右の平衡	30	57.7	21	35.0	**
	左右の強調不明確	17	32.6	29	48.3	*
地平	II 地面なし	36	69.2	30	50.0	**
幹の基部	広い基部	18	34.6	19	31.6	
	普通	19	36.5	21	35.0	
幹	II 幹の位置(X軸)——中	30	57.7	33	55.0	
	III 〃 (Y軸)——下中	26	50.0	22	36.7	
	VII 輪郭——直線(線)	30	57.7	31	51.7	
枝	I 枝の数——4本以上	24	46.2	28	46.7	
	II 二線枝（分枝あり）	24	46.2	35	58.3	
	III 全上向枝	31	59.6	40	66.7	
	VI 管状枝	18	34.6	24	40.0	
	尖状枝	17	32.7	19	31.7	

** $P < .05$　* $P < .10$

表1-(3)　出現率が一方の群のみ30%以上の項目

	項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
全体的所見	Ⅸ 冠強調	18	34.6	12	20.0	*
幹の基部	紙下縁立	10	19.2	18	30.0	
幹	Ⅰ 二線幹（断線あり）	8	15.4	20	33.3	**
	Ⅲ 幹の位置（Y軸）——充溢（上中下）	16	30.8	37	61.7	***
	Ⅵ 管状幹（上開放）	9	17.3	24	40.0	***
	Ⅶ 輪郭——直線（面）	14	26.9	20	33.3	
	Ⅷ 幹表面——白（空白）	18	34.6	6	10.0	***
	線	12	23.1	26	43.3	**
	全陰影	5	9.6	24	40.0	***
枝	Ⅰ 枝の数——多数	5	9.6	27	45.0	***
	Ⅳ ふくらみのある枝	13	25.0	22	36.7	*
	つぎ木枝	12	23.1	37	61.7	***
	Ⅴ 枝立体描写	4	7.7	20	33.3	***
	Ⅶ つぎ木分枝	11	21.1	34	56.7	***
	Ⅲ 枝方向——混合（上向・水平・下向）	8	15.4	18	30.0	*
果・花・葉	Ⅰ 果・花・葉なし	24	46.2	•	•	***
	果と葉	5	9.6	39	65.0	***

*** P<.01　　** P<.05　　* P<.10

表1-(4)　出現率が両群とも30%未満かつ，両群または一方の群が10%以上の項目

	項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
全体的所見	Ⅸ 幹強調	8	15.4	14	23.3	
	冠幹強調不明確	4	7.6	9	15.0	
	Ⅹ 右強調	4	7.6	6	10.0	
	Ⅸ 右への傾斜	3	5.8	9	15.0	
	左への傾斜	9	17.3	7	11.7	
地平	Ⅱ 地面——陰影	1	1.9	11	18.0	***
	線のみ	3	5.8	14	23.3	***
根	Ⅰ 根の数——4本以上	9	17.3	5	8.3	
	Ⅱ 二線根（断線なし）	11	21.2	4	6.7	**
	不明確	•	•	6	10.0	**
	Ⅳ 太（ふとい）	8	15.4	1	1.7	***
	開（先が開いている）	9	17.3	6	10.0	
	陰影あり	1	1.9	6	10.0	*
	陰影なし	11	21.2	2	3.3	***

続 表1-(4)

幹	Ⅱ 幹の位置(X軸) —— 左	14	26.9	14	23.3	
	充溢(左・中・右)	1	1.9	11	18.3	**
	Ⅲ 幹の位置(Y軸) —— 上	3	5.8	10	16.7	*
	下	11	21.2	15	25.0	
	Ⅴ 幹の太さ —— 太	8	15.4	7	11.7	
	—— 細	3	5.8	11	18.3	**
	Ⅵ ふくらみ	13	19.2	7	11.7	
	くびれ	11	21.2	13	21.7	
	管状幹（上下開放）	8	15.4	4	6.7	
	Ⅶ 輪郭 —— 散慢な線	2	3.8	8	13.3	*
	断線	5	9.6	6	10.0	
	Ⅷ 表面 A —— しみ	1	1.9	6	10.0	*
	部分陰影	4	7.7	6	10.0	
	Ⅸ 表面 B —— 切り口	6	11.5	4	6.7	
枝	Ⅰ 枝の数 —— 枝なし	13	25.0	1	1.7	***
	二～三本	7	13.5	4	6.7	
	Ⅱ 二線枝（分枝なし）	11	21.2	5	8.3	*
	一・二線枝の混合	2	3.8	17	28.3	***
	Ⅳ アーチ状枝	3	5.8	13	21.7	**
	くびれのある枝	9	17.3	17	28.3	
	Ⅴ 不連続枝	6	11.5	14	23.3	
	刈り取られた枝（枝先直）	4	7.7	6	10.0	
	Ⅶ 分枝なし	11	21.2	5	8.3	**
冠	Ⅰ 雲・ボール型冠	11	21.1	7	11.7	
	アーケード型冠	7	13.5	・	・	***
	枝葉型冠	8	15.4	8	13.3	
	波状型冠	8	15.4	・	・	***
	Ⅱ 輪郭＋陰影（全部・一部分）	6	11.5	4	6.8	
	輪郭＋線影（全部・一部分）	6	11.5	3	5.0	
果・花・葉	Ⅰ 果のみ	4	7.7	9	15.0	
	葉のみ	13	25.0	10	16.7	
	果・花・葉の暗示・あいまい	7	13.5	5	8.3	
	Ⅱ 果の過大	3	5.8	11	18.3	**
	果の黒塗り	1	1.9	7	11.7	**
	空間倒置（Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ）	2	3.8	8	13.3	*
	果・葉の常同	1	1.9	6	10.0	*
	冠中浮遊果・葉	7	13.5	2	3.3	**

*** P<.01　** P<.05　* P<.10

表1-(5)　出現率が両群とも10%未満かつ，両群または一方の群が5%以上の項目

	項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
全体的見所	X 左　強　調	2	3.8	4	6.7	
	XI 右　へ　の　傾　向	•	•	3	5.0	
風景および附属物	草　・　花	3	5.8	1	1.7	
地平	I 地平線 —— 暗　示	•	•	5	8.3	*
	傾斜（右上）	3	5.8	•	•	
	水平（断線）	3	5.8	•	•	
	島状または丘状	3	5.8	5	3.3	
	II 地　面 —— 線　影	3	5.8	•	•	
	黒　塗　り	2	3.8	4	6.7	
幹基の部	左　ふ　く　ら　み	2	3.8	4	6.7	
	右　ふ　く　ら　み	1	1.9	5	8.3	
根	I 根の数 —— 2 ～ 3 本	3	5.8	1	1.7	
	不　明　確	1	1.9	4	6.7	
	根の有無が不明	•	•	3	5.0	
	II 二　線　根（断線より）	2	3.8	3	5.0	
	IV 長（ながい）	3	5.8	•	•	
	短（みじかい）	3	5.8	1	1.7	
	閉（先が閉じている）	5	9.6	1	1.7	*
	直　根	4	7.7	•	•	*
幹	II 幹の位置（X軸） —— 右　中	5	9.6	•	•	**
	右・右出	3	5.8	•	•	
	III 幹の位置（Y軸） —— 中	4	7.7	•	•	*
	下	5	9.6	2	3.3	
	IV T　幹	3	5.8	2	3.3	
	VI 折れ曲がり	•	•	4	6.7	
	VII 輪　郭 —— 波型線	3	5.8	2	3.3	
	VIII 表面 A —— き　ず	4	7.7	2	3.3	
	曲　線	3	5.8	1	1.7	
	左陰影	5	9.6	3	5.0	
	右陰影	3	5.8	5	8.3	
	IX 表面 B —— 瘤・洞	•	•	3	5.0	
枝	I 枝の数 —— 一　本	3	5.8	•	•	
	III 水平方向枝	3	5.8	4	6.7	
	V 冠下枝	4	7.7	3	5.0	
	切り口側枝（立体描写）	3	5.8	•	•	
	VI 平行枝	3	5.8	1	1.7	
	先へいくほど太くなる枝	4	7.7	5	8.3	
	VII 直行分枝	5	9.6	4	6.7	
	分枝先直	4	7.7	•	•	

続 表-1(5)

冠	Ⅱ 陰影冠	1	1.9	3	5.0	
	果または葉重積冠(輪郭有・無含)	1	1.9	4	6.8	
	輪郭のみ	3	5.8	・	・	
	Ⅲ 押しつぶされた冠	・	・	3	5.0	
果・花・葉	Ⅱ 葉の黒塗り	・	・	4	6.7	
	地面に落ちている果・葉	2	3.8	3	5.0	

** P<.05　* P<.10

表1-(6) 空間利用の領域

	L 9 (17.3) 12(20.0)	**K** 11(21.2) 21(35.0)	**J** 9 (17.3) 17(28.3)	
A 6 (11.5) 7 (11.7)	**1** * 15(28.8) 28(46.7)	**4** ** 34(65.4) 49(81.7)	**7** 12(23.1) 22(36.7)	**I** 9 (17.3) 6 (10.0)
B 3 (5.8) 4 (6.7)	**2** 11(21.2) 10(16.7)	**5** *** 36(69.2) 54(90.0)	**8** 8 (15.4) 10(16.7)	**H** * 4 (7.6) ・ ・
C 5 (9.6) 7 (11.7)	**3** 4 (7.6) 7 (11.7)	**6** 34(65.4) 44(73.3)	**9** 2 (3.8) 5 (8.3)	**G** 6 (11.5) 8 (13.3)
	D 10(19.2) 19(31.7)	**E** 15(28.8) 22(36.7)	**F** 7 (13.4) 14(23.9)	

上段：性非行群
下段：一 般 群
( ) 内は%

いずれの領域をも1/2を占めておらず，領域のとれないものは，
性非行群 1 (1.9)
一 般 群 2 (3.3)

*** P<.01　** P<.05　* P<.10

表1-(7) 根・構成 B (領域)

	L	**K**	**J**	
A	**1**	**4**	**7**	**I**
B	**2** 2 (3.8) ・ ・	**5** 3 (5.8) ・ ・	**8** 1 (1.9) ・ ・	**H**
C 1 (1.9) 1 (1.7)	**3** 9 (17.3) 10(16.7)	**6** 10(19.2) 13(21.7)	**9** 5 (9.6) 10(16.7)	**G** ・ ・ 1 (1.7)
	D 2 (3.8) 1 (1.7)	**E** 2 (3.8) 2 (3.3)	**F** 1 (1.9) 1 (1.7)	

上段：性非行群
下段：一 般 群
( ) 内は%

（表1-(5)）や出現しなかった項目については，両群とも出現率が極めて低いという点において共通しており，この結果も意味深い。

空間利用の領域では，両群ともに「中央部分４，５，６の領域の利用」が多い（表1-(6)）。

次に，相違点として，出現率に有意差のみられた項目のうち，重要なものをあげる。

まず，「地平・地面」（表2-(1)）では，「地面なし」が性非行群に有意に多いが，一般群にも50％現われている。したがって，「地面なし」は有意差がみられてはいるが，両群ともに比較的出現率が高いという点において共通性があると言える。地面を描いている者では，「陰影や線のみ」が一般群に有意に多い。「陰影」，「線影」，「線のみ」，あるいは「黒塗り」によって地面の存在を

表2　性非行群と一般群で出現傾向に相異のみられた項目

表2-(1)　地平・地面

項目	性非行群		一般群		x^2 検定結果
	F	%	F	%	
地面なし	36	69.2	30	50.0	**
陰影・線等なし	・	・	1	1.7	
陰影	1	1.9	11	18.0	***
線影	3	5.8	・	・	
線のみ	3	5.8	14	23.3	***
黒塗り（塗りつぶし）	2	3.8	4	6.7	
木の影	1	1.9	・	・	
草・花・石等のみによる暗示	2	3.8	2	3.3	

*** P＜.01　　** P＜.05

表2-(2)　幹・構成

項目	性非行群		一般群		x^2 検定結果
	F	%	F	%	
二線幹（断線あり）	8	15.4	20	33.3	**
二線幹（断線なし）	44	84.6	40	66.7	**

幹・幹の位置（X軸）

項目	性非行群		一般群		x^2 検定結果
	F	%	F	%	
左	・	・	2	3.3	
左中	14	26.9	14	23.3	
中	30	57.7	33	55.0	
右中	5	9.6	・	・	**
右	1	1.9	・	・	
右出	2	3.8			
充溢（左・中・右）	1	1.9	11	18.3	**

続 表2-(2)　幹・幹の位置（Y軸）

項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
上出	3	5.8	10	16.7	*
上中	1	1.9	・	・	
中	4	7.7	・	・	*
下中	26	50.0	22	36.7	
下	5	9.6	2	3.3	
下出	11	21.2	15	25.0	
充溢（上・中・下）	16	30.8	37	61.7	***

幹・表面 A

項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
白（空白）	18	34.6	6	10.0	***
きざ（ぎざぎざ）	4	7.7	2	3.3	
線	12	23.1	26	43.3	**
曲線（カーブ・弧）	3	5.8	1	1.7	
しみ	1	1.9	6	10.0	*
左陰影	5	9.6	3	5.0	
右陰影	3	5.8	5	8.3	
全陰影（塗りつぶし）	5	9.6	24	40.0	***
部分陰影	4	7.7	6	10.0	

*** P<.01　** P<.05　* P<.10

表2-(3)　枝・枝の数

項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
枝なし	13	25.0	1	1.7	***
一本	3	5.8	・	・	
二～三本	7	13.5	4	6.7	
四本以上	24	46.2	28	46.7	
多数	5	9.6	27	45.0	***

枝・構成

項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
一線（分枝あり）	2	3.8	1	1.7	
二線枝（分枝なし）	11	21.2	5	8.3	***
二線枝（分枝あり）	24	46.2	35	58.3	
一・二線枝の混合	2	3.8	17	28.3	***

*** P<.01

表2-(4)　果・花・葉

項目	性非行群 F	性非行群 %	一般群 F	一般群 %	x^2 検定結果
果・花・葉なし	24	46.2	・	・	***
果のみ	4	7.7	9	15.0	
葉のみ	13	25.0	10	16.7	
果と葉	5	9.6	39	65.0	***
果・花・葉の暗示，あいまい	7	13.5	5	8.3	

*** $P < .01$

明瞭に表わしている者は，性非行群が17.3%であるのに対して，一般群では48.0%である。

「幹」(表2-(2))では，両群とも全て「二線幹」であるが，輪郭線に「断線あり」が一般群に有意に多い。しかし，一方，「断線なし」は一般群にも66.7%現われており，したがって，この項目も両群ともに出現率が高く，共通性があると言える。「幹の位置（X軸）」では，「右中」，「右」，「右出」といった右寄りのものが性非行群にのみみられた。「幹の位置（Y軸）」では，「上中下への充溢」が性非行群では30.8%であるが，一般群では61.7%と2倍以上現われている。また，「幹の上へのはみ出し（上出）」も一般群に多い。「幹表面」について見ると，「表面の白（空白）」が一般群では10%であるが，性非行群では34.6%である。逆に，表面に線や全陰影の描かれているものは，いずれも一般群に有意に多い。

「枝」(表2-(3))については，「枝なし」や「主枝は描かれても分枝なし」といった不十分な枝構造のものが性非行群では，それぞれ25.0%，21.2%であるが，一般群では1.7%，8.3%と有意に少ない。逆に，10本以上の「多数の枝」は性非行群では9.6%であるが，一般群では45.0%である。また，一般群には，「一・二線枝の混合」で複雑多様な枝構造を描いた者が性非行群に比べて多い。枝の特徴としては，「つぎ木枝」や「つぎ木分枝」が一般群で有意に多く，また，「枝立体描写」も性非行群では7.7%であるが，一般群では33.3%である（表1-(3)）。

最後に，「樹冠」(表2-(4))では，「果・花・葉なし」が一般群では皆無であるのに対して，性非行群では46.2%現われている。逆に，果と葉の描写は性非行群では9.6%であるが，一般群では65.0%と有意に多い。「葉」の描写（「葉のみ」＋「果と葉」）に注目すると，性非行群では34.6%，一般群では81.7%となる。一谷他（1968）の発達的研究によると，葉の描写は中学2年生で86%，3年生で76%である。したがって，一般群の出現率は，この結果にほぼ一致するが，性非行群のそれは少ないと言える。葉の描写は精神発達に関連すると述べられていることから，今回の結果は性非行群の発達的問題を示唆している。次に，「果」の描写（「果のみ」＋「果と葉」）に注目すると，性非行群では17.3%，一般群では80.0%と，大差がある。一般群には，「果の過大」や「黒塗りによる果の強調」も有意に多い。樹冠の形態では，「アーケード型冠」や「波状型冠」が性非行群にのみ現われた（表1-(4)）。

考　　察

Koch (1979) の解釈仮説に基づいて結果で述べられた各サインの意味を解釈し，両群の人格特性や適応様式にみられると推測できる共通点および相違点を考察する。

まず，両群に共通性の高い項目の解釈から，概して次のような人格特性が両群に共通していると推測できる。すなわち，活動意欲が高く，生活に対する積極的態度を持つ者や，逆に，夢想的で自己に深い関心を寄せる者は両群ともに少ない。防衛的態度や抑圧傾向，あるいは物事への没頭性や易影響性を顕著に示す者も少ない。むしろ，自己の生活空間の中心に自己を置いて，無難な態度で適応しようとする者が多い。また，環境に向かって伸び拡がろうという要求は持つが，まだ自己と環境との関連性を具体的に認知できず，方向や目標を見い出せない。今ひとつ立脚点も定まらず，将来への不安もあって，心理的に不安定である。他者に対して用心深くなり，攻撃的行動に出やすい。このような人格特性は，一面で現代青少年の一般的傾向と言われる無気力・無関心をうかがわせるとともに，思春期女子の不安定感や焦燥感をよく反映している。従来，心理的不安定や攻撃的傾向は非行児の特徴として指摘されてきたが，今回の結果では一般児にも広く認められる傾向である。したがって，性非行児に限らず，問題行動を示す児童の理解に際しては，同年齢の一般児との共通点にも注目する必要があると考える。

次に，両群で出現率に有意差のみられた項目の解釈に基づいて，両群の相違点を考察する。まず，「地面」の描写は，自己の環境に対する自覚を表わすと解釈できる。したがって，自己の環境に対する自覚の薄い者は両群ともに多いのであるが，その傾向は性非行群に著しく，一般群では良いにつけ悪いにつけ自己の環境を自覚している者が多いと推測できる。中学２，３年生では，まだ家庭と学校が主要な生活領域であり，社会的経験も限られている。そのため，広い社会的視野に立っての自己の環境の客観的・現実的認識や，自己と環境との関連性の理解が可能な者は少ないと考えられる。先述の結果も性非行群には，その生活環境が一般群に比べて劣悪で種々の問題を抱える場合が多いにもかかわらず，そのような環境を客観視できている者が予想に反して少ないことを示唆している。むしろ，彼女たちは自己の生活環境，特に家庭や学校の場を情緒的安定の確保できない疎遠なものとして漠然と感じており，そのため具体的な対処もできず，結果的に，他のより満足の得られそうな場を求めて家庭や学校から離反してしまうと考えられる。一方，一般群には，社会的関心や視野を広げることにより，自己の環境を疑問視したり，環境の良い面悪い面を現実的に認識したりすることが可能な者が少数ながらいることをうかがわせる。

「幹」については，「上中下への充溢」等から，一般群に自我主張の強い者が多く，一方，性非行群には適切な自我主張ができにくい受動的傾向の者が多いと推測できる。次に「幹表面」であるが，これは自己と環境との接触の様態を表わすと考えられる。一般群に表面の線等の描写が多いことは，環境との摩擦・葛藤に自我関与し，それに悩んでいる者が一般群に多いことを示唆している。自我主張の強さや，環境との摩擦・葛藤の体験，それに自我関与して悩むといったことは思春期の特徴とも言える。Erikson (1979) は，葛藤に悩み混迷することを通して環境や自己についての認識を深め，自我同一性を確立していくのが青年期（思春期）の課題であると述べている。しかし，自我主張や内面的な悩みのキープと自己探索には，自我の強さと成熟が必要である。この意味で，一般群には思春期の課題に直面できるだけの自我の成熟段階に達している者が多いと考えられるのに対して，性非行群には，むしろ，葛藤に自我関与して内面的に悩むよりは行動化 (acting-out) してしまう傾向の者が多く，その一要因として自我の成熟の遅れが推測できるのである。

次に，「枝」は人間の腕や手に相当し，枝の描写は環境と相互交流する能力を表わすと解釈できる。したがって，枝の不十分な描写の多い性非行群には，環境への働きかけが未熟で，環境か

ら成長の糧となるものを効果的に吸収できにくい者が多いと推測できる。また，このことは，性非行群に対人関係の未熟な者が多く，対人関係を情緒的満足の得られる関係へ深めたり，その関係を通じて他者から種々のものを吸収するとともに，自らも適切に他者に対して自己表現したりすることが困難な者の多いことを示唆している。環境との相互交流については，一般に次のように言われる。個人は自己の置かれた環境に対して最大の効果をもたらすような仕方で関係を持とうとする。そして，環境との長期間の相互交流の過程を通じて，個人の環境との関係の仕方は逐次修正されながら形成されていく。ところで，性非行群の多くの者は問題の多い養育態度のもとで成長してきている。養育者との基本的信頼関係は稀薄であり，彼女たちの自発的な働きかけは尊重されず，適切な応答性にも欠けていたと考えられる場合が多い。性非行群の環境や他者との関係にみられる問題性は，このような養育環境が一因となって，幼少期から漸次形成されてきたと考えられる。さらに，現時点の生活環境やそこでの対人関係が彼女たちの対人関係の仕方に適応していれば，問題性は修正されることなく固定化していくことと予想できる。そのため，現時点においても情緒的安定の依りどころとなる相互理解に基づいた持続的な対人関係を形成していけず，その心理的不安定感や空虚感を感覚的・表面的な対人関係の中で一時的にでも一体感を体験することで癒そうとする傾向が前面に出てくると考えられるのである。

次の「葉」の描写は成長の芽を表わすとともに，情緒的繊細さや感受性，環境に応じた自己のカムフラージュを表わすと解釈できる。いわゆる社会的適応能力の発達指標であると言える。したがって葉の描写の少ない性非行群には，対人関係において情緒的ニュアンスを敏感に感じとったり，自己の行動や意志・感情等の自己表現を場の状況や他者の反応に応じて調節したりすることが難しい者が多いと推測できる。情緒的感受性の豊かさや適切な自己表現は，幼少期――おそらく乳児期――からの養育者との相互交流の中で発達し学習されていく。したがって，ここでも性非行群の幼少期の養育者の対応や家族内人間関係が問題となるであろう。

最後に，「果」の描写は，目標や成功による動機づけや自己の能力の表示を表わすと解釈できる。一般群に「果」の描写や強調が多いことは，中学２，３年という年齢から考えて，勉学や進学の目標に強く動機づけられて目的的に努力している者や，自己の能力（学力）に敏感になっている者が多いことを示唆している。一方，性非行群では，知的には正常であるにもかかわらず，学校での学習意欲を喪失し，進学等についても目的的に努力する目標を持てない者が多いことをうかがわせる。一般に，勤勉性は，勉学や進学に限らず，種々の領域で自己の能力を高め，可能性の発揮できる場を拡張していくことにつながる。性非行群の多くの者に勤勉性が乏しいことは，やはり彼女たちが幼少期から勤勉性の芽を伸ばすような励ましや承認を十分に環境から受けられなかったことと無関係ではないであろう。

研　　究 II

目　　的

研究Ｉでは，『バウムテスト整理表』の項目に着目して性非行群と一般群の共通点および相違点を検討したが，ここでは，バウムを全体像として把えて両群の特徴を比較することを目的とした。

対　　象

研究Ⅰと同様である。

方　　法

研究Ⅰのバウムを次のように整理した。まず，両群の間で1％および5％水準で出現率に有意差のみられた項目（表3），すなわち，性非行群に有意に高い出現率で現われた14項目（以下，「14項目（性＞－）」と略記する）および一般群に有意に高い出現率で現われた19項目（以下，「19項目（性＜－）」と略記する）が両群の各被験者のバウムにどの程度現われているかを調べて，その個数を合致数とした。次に，「14項目（性＞－）」および「19項目（性＜－）」について，両群の合致数の分布を調べ，分布図に表わした（表4，5，図1，2）。例えば，表4および図1についてみると，「14項目（性＞－）」のうち5項目をバウムに表現している者が，性非行群には8名（15.4％），一般群には1名（1.7％）いることがわかる。

次に，合致数に基づいて，両群からそれぞれの群の典型例と考えられるバウムを選んでみた。まず，性非行群からは，「14項目（性＞－）」との合致数が多くて「19項目（性＜－）」との合致数が少ないバウム（写真：性非行群のバウム No. 1～No. 11 など），一般群からは，「14項目（性＞－）」との合致数が少なくて「19項目（性＜－）」との合致数の多いバウム（写真：一般群のバウム No. 1～7 など）を選んだ。さらに，性非行群のなかでも「写真：性非行群のバウム No. 1～No. 11 など」と逆の傾向を示しているバウム，つまり，「14項目（性＞－）」との合致数が少なくて「19項目（性＜－）」との合致数が多いバウム（写真：性非行群のバウム No. 12～15 な

表3　出現率が，性非行群または一般群に有意に多い項目

出現率が性非行群に有意に多い項目		出現率が一般群に有意に多い項目	
二線幹（断線なし）	＊＊	二線幹（断線あり）	＊＊
左右への平衡	＊＊	幹の位置（Y軸）――充溢（上中下）	＊＊＊
地面なし	＊＊	管状幹（上開放）	＊＊＊
幹表面――白（空白）	＊＊＊	幹表面――線	＊＊
果・花・葉なし†	＊＊＊	――全陰影	＊＊＊
二線根（断線なし）	＊＊	枝の数――多数	＊＊＊
根――太（ふとい）	＊＊＊	つぎ木枝	＊＊＊
――陰影なし	＊＊＊	枝立体描写	＊＊＊
枝の数――枝なし	＊＊＊	つぎ木分枝	＊＊＊
分枝なし	＊＊	果と葉	＊＊＊
アーケード型冠†	＊＊＊	地面――陰影	＊＊＊
波状型冠†	＊＊＊	――線のみ	＊＊＊
冠中浮遊果・葉	＊＊	根――二・二線根不明確†	＊＊
幹の位置（X軸）――右中†	＊＊	幹の位置（X軸）――充溢（左中右）	＊＊
		幹――細	＊＊
		枝――一・二線枝の混合	＊＊＊
		アーチ状枝	＊＊
		果の過大	＊＊
		果の黒塗り	＊＊

＊＊＊ P＜.01
＊＊ P＜.05
† 一方の群のみに出現した項目

表4　14項目（性＞―）との合致数による分布

合致数		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	M	SD
性非行群 N＝52	F	1	4	6	7	9	8	6	6	3	2	4.48	2.70
	%	1.9	7.7	11.5	13.5	17.3	15.4	11.5	11.5	5.8	3.8		
一般群 N＝60	F	4	19	24	8	4	1					1.87	1.05
	%	6.7	31.7	40.0	13.3	6.7	1.7						

表5　19項目（性＜―）との合致数による分布

合致数		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	M	SD
性非行群 N＝52	F	9	17	8	9	3	4	1	1						2.02	1.62
	%	17.3	32.7	15.4	17.3	5.7	7.7	1.9	1.9							
一般群 N＝60	F			3	2	7	10	9	7	9	8	4		1	6.48	2.26
	%			5.0	3.3	11.7	16.7	15.0	11.7	15.0	13.3	6.7		1.7		

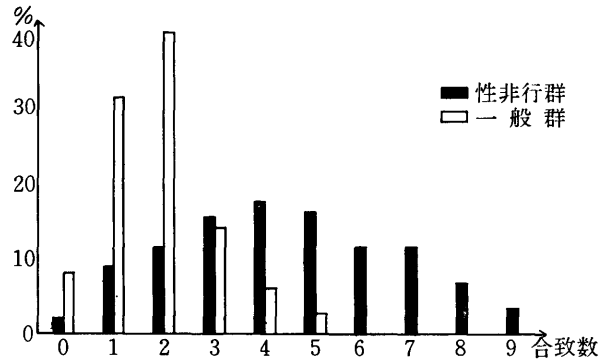


図1　「14項目（性＞―）*」との合致数による分布
* 文中参照のこと(p. 29)。

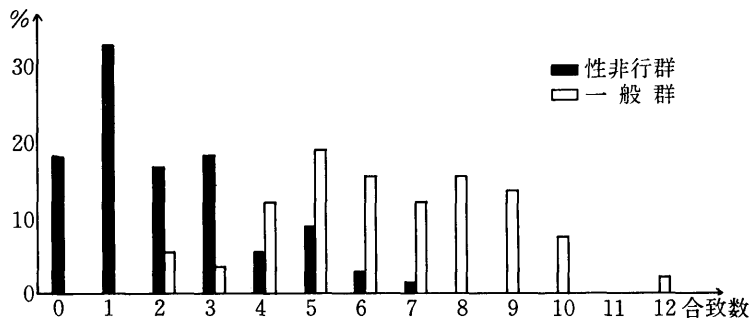


図2　「19項目（性＜―）*」との合致数による分布
* 文中参照のこと(p. 29)。

ど）も提示するとともに，一般群のなかからも「14項目（性＞一）」との合致数が多く，「19項目（性＜一）」との合致数の少ないバウム（写真：一般群のバウム No. 8, 11 など）なども提示した。

結　　果

図1の分布図をみると，「14項目（性＞一）」については，一般群は性非行群に比べて合致数の少ない方に片寄っているが，性非行群の中にも合致数の少ないバウムもあり，分布に重なりが認められる。図2の分布図に示された「19項目（性＜一）」についても，性非行群が逆に一般群に比べて合致数の少ない方に片寄ってはいるが，やはり両群の分布には重なりが認められる。

考　　察

分布図（図1，2）にみられる重なりからわかるように，両群のいずれかにおいて有意に高い出現率を示す項目群によっても，性非行群と一般群を明確に区分することは不可能であると言えよう。このことは，バウムテストからみる限りにおいては，性非行群にも一般群と類似した人格特性を有する者が多くあり，一方，一般群にも性非行群と類似した人格特性を示す者，いわゆる性非行予備群となる可能性のある児童がいることを示唆している。なお，「14項目（性＞一）」のうち，性非行群にだけ現われた項目――「果・花・葉なし」，「アーケード型冠」，「波状型冠」，「幹の位置（X軸）―右中」――は，解釈上意味深いと考えられるので，留意しておく必要があるだろう。

次に，写真に示されたバウムについて考察する。まず，性非行群および一般群の典型例としてあげられた，性非行群の写真 No. 1～No. 11 と一般群の写真 No. 1～No. 7 などとを比較すると，前者のバウムには全体に白っぽくて空虚な印象を受けるものが多い。地平の描写がなく，「幹表面空白」，「枝なし」か，あっても枝数が少なくて分枝がなく，葉も描かれていない点が特徴的である。「アーケード型冠」や「波状型冠」もみられる。一方，後者のバウムには，「地面」が描かれ，「幹表面にも線」などがあり，多数の分化した枝や葉・果の描写のある点が特徴的である。これらの典型的例には，両群の人格特性や環境に対する適応様式の相違が明確に反映されている。ところが，同じ性非行群のバウムでも写真 No. 12～No. 15 は写真 No. 1～No. 11 と異なる特徴を示している。すなわち，幹表面には線や陰影が描かれており，枝数は多く，分枝も多数あり，葉・果も描かれている。写真 No. 1～No. 11 に比べると表現が豊かである。このことは，性非行群の中にも，研究Ⅰで述べた性非行群の人格特性や適応様式とかなり異なる傾向を示す者がおり，不純異性交遊等の同一問題行動の発生機序にも種々異なるものが予想されることを示唆している。

なお，一般群のバウムの中には「19項目（性＜一）」との合致数が少ないバウム（写真 No. 17～No. 18）がみられる。これらでは未成熟サインが他の一般群のバウムに比べて目立っており，「19項目（性＜一）」を現わすだけの成熟度に達していない者のバウムであることを推測させる。

事　　例　1

事例の説明

中学3年生。中1時にボンド遊びで警察説諭2回，中2時に集団で自転車盗，喫煙，怠学，家

出，不純異性交遊等により警察から児童相談所へ通告され，２号措置される。父親は組関係に入っており，本児が幼少期より女性を作っては家出を繰り返していたが，本児が小６時に父親の浮気から両親離婚。以後，母親は生活保護を受けている。本児は父親を嫌っていた。本児が中３の現在，43歳の母親は27歳の左官業の男性と同棲中。本児，兄の４人で老朽化した６畳と台所のアパートに居住している。母親は同棲中の男性の圧力があり，母親としての役割がとれず，本児に対する監護力もない。本児とその男性との関係は稀薄。措置後も本児は家出を繰り返し，それに対して母親も諦観しており，積極的姿勢を欠いている。本児は淋病治療中である。本事例では，養育環境や養育者の態度に問題が大きい。家庭内人間関係は稀薄で情緒的つながりに欠けており，本児も幼少期から家庭を情緒的安定の場とすることができなかったと考えられる。

バウムテスト解釈（写真：性非行群のバウム No. 1）

白っぽくて空虚な感じの性非行群の典型的バウムの一例である。地平・地面の描写を欠き，幹表面空白，枝数少なく，葉や果はない。木はやや小さく，左上向へ片寄っている。

知的には正常と推定でき，問題となる人格的偏りは認められない。他者への関心や社会的適応能力はあるが，受動的・傍観的で積極性に欠ける。人当りの良さや従順さは見られるが，対人関係は未熟であり，情緒的繊細さにも乏しい。したがって，対人関係は表面的に終わりやすく，その関係の中で情緒的安定を確保するまでに深まらない。環境との葛藤を十分に意識化したり，自己と環境との関連性を認知したりできないため，自己の行動について疑問を感じることはあまりなく，悩む中から洞察を深め成長していくことが困難であると予想できる。

事　　例　2

事例の説明

中学２年生。中２時にシンナー遊び，喫煙，窃盗，不純異性交遊で４回通告される。養父，実母，弟の４人家族，経済状態は普通。酒乱で本児にも暴力をふるった実父は本児が３才時に死亡，４才時に実母は配管工の養父と再婚。養父は性格的問題はないが，価値観が古く，本児の問題行動に対して厳しく叱る。本児は，恐い父親だが自分のためを思って叱ってくれると受けとめている。保険外交員の実母は新興宗教の熱心な信者で，ニューロティックな性格。本児は小学生の頃から家事を分担していたが，中学生になって反発し，養父が不在だと遅くまで遊ぶようになり，母子のトラブルが多い。両親の養育態度は熱心だが，一方的である。本児は小６時より柔道を習い始め，将来，女子プロレスラーになる夢を持つが，一方で，自分の大きな身体には劣等感が強い。２号措置により指導後はある宗教団体の青年部で活動しており，問題行動はなくなった。養父の態度も緩和し，家庭環境は安定している。

バウムテスト解釈（写真：性非行群のバウム No. 14）

枝葉が密に描かれ，幹表面には円弧状の模様がある。しかし，地面の描写はなく，枝は一線枝である。知的発達は正常と推定でき，人格的偏りも認められない。野心が強く，成功を夢見て過度に熱中しやすいが，自己の過大評価や社会的視野の狭さのため，その努力は現実性を欠いたものになりやすい。まだ，自己の環境に対する自覚も薄く，自己を環境の中に位置づけることがで

きていないと言える。対人関係は未熟であるが，感受性の豊かさがあり，他者との情緒的交流は可能であろう。承認欲求が強く，外観を気にするため，自己表現は抑制されやすい。したがって，他者への接触欲求は高いが，まだ対人関係における不安が強く，防衛的である。自己を率直に表現し，自己の現実の姿を認知していきながら，相互理解に基づく対人関係を形成していくのが本児の課題とも言える。本事例では，生活環境に比較的問題が少ないこと，本児の適応意欲と快活さ，対人関係での感受性等が予後良好へ導いた要因とも考えられる。

結　　論

バウムテストによる性非行群と一般群との比較から，次のことが明らかになった。まず第一に，性非行群の基本的人格特性には一般群のそれと比較して共通点が多く見い出され，問題となる偏りは明瞭には認められなかった。相違点はむしろ，環境との関係のあり方，特に対人関係において認められた。そして，それには養育環境や養育者の態度，さらに現時点の生活環境等の環境的要因が大きく影響しているのであり，彼女たちを理解するに際してはその点を十分に検討することが不可欠であると言える。Greenwald (1958) は，コールガールの精神分析を通じて，彼女たちの幼少期の愛情や暖かみを奪われたという感情，あるいは自分が求められてもおらず何にも所属していないという感情が，その後の対人関係を歪め，社会的適応を阻害することを強調している。このことは本研究の性非行群についても一面当てはまると言える。相違点のもう１つは思春期という人格発達上の重要な時期の過ごし方にある。一般群には，種々の葛藤に悩む中から現実的認識を深め，自己探索を始めている者が多いと推測できる。それに対して性非行群には，葛藤に悩む者が少ない，換言すれば，悩むことができるために必要な安定の場が確保できず，そのため思春期の孤独感や焦燥感を行動化によって解消するしかない者が多いと考えられる。これには自我の成熟度の問題もあるが，性非行群の生活環境（特に家庭の母子関係をはじめとする対人関係）や彼女たちの対人関係の持ち方の問題性のために，思春期の不安定感や孤独感を緩和し支える親密な対人関係が確保しにくいことも関連していると言える。

最後に，性非行群に限らず，広く問題行動を起こす青少年に対応する場合，他の一般青少年との共通点にも十分注意する必要があると考える。それにより，彼らの人格特性や適応様式の問題性がより明確化し，処遇を考えるに際して留意すべき点も浮かび上がってくると言える。また一方，一般青少年についても問題行動の潜在的可能性を洞察していくことの必要性を認識させてくれるのである。

引用・参考文献

遠藤辰雄．1974．非行心理学．現代心理学シリーズ８．朝倉書店．
Erikson, E. H. 1959. Identity and the life cycle. Psychological Issues. Vol. 1, No. 1, Monogr. 1, International Universities Press, Inc. 小此木啓吾（訳）．1979．自我同一性．誠信書房．
Greenwald, H. 1958. The call girl : A social and psychoanalytic study. English : Ballantine Books. 中田耕治（訳）．1959．コールガール――一精神分析医の診断記録．荒地出版社．
福島　章．1978．性的逸脱行動．臨床精神医学，7(6)，37-44.
一谷　彊・林　勝造・津田浩一．1968．樹木画テストの研究―― Koch の Baumtest における発達的検討．京都教育大学紀要，Ser. A．33，47-68.

菊地和典・堀内　守（編）. 1981. 性非行. 学事出版.
Koch, C. 1952. The Tree Test : The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis. Bern : Hans Huber.
林　勝造・国吉政一・一谷　彊（訳）. 1971. バウムテスト——樹木画による人格診断法. 日本文化科学社.
国吉政一・林　勝造・一谷　彊・津田浩一・斎藤通明. 1980.『バウム・テスト整理表』,『バウム・テトス整理表——手引き』. 日本文化科学社.
倉智佐一（編）. 1978. 児童理解の方法. ミネルヴァ書房.
総理府青少年対策本部編. 1977. 青少年白書.
津田浩一・藤田恵子. 1977. 大阪市における性非行児童に関するリサーチ——その態様・発生機制・処遇のあり方について. 犯罪と非行, 32, 124-162. 1980. 日本の犯罪学6. 東大出版会.
山上　皓. 1981. 女性の犯罪と非行——近年の女性犯罪の動向をめぐって. 臨床精神医学, 10, 47-58.
山下真理子・一谷　彊・国吉政一・津田浩一・林　勝造. 1982. 性非行児のバウムテストからみる人格像. 日本心理学会第46回大会論文集, 394.
山下真理子. 1982. 不純異性交遊児童の人格像——バウムテストからの検討. 少年補導, 第27巻, 第11号, 50-57.

本論文の一部は日本心理学会第46回大会（1982，京都国際会議場）にて発表した。

なお，本論文のための資料を提供して下さいました岡村憲一氏（大阪府中央児童相談所判定課長），西川満氏（京都府精神薄弱者更生相談所），西尾博氏（京都市児童相談所心理係長），およびバウムを描いて下さった多数の児童たちに心からお礼を申し上げます。

Summary

The purpose of the present study was to investigate the personality characteristics of girls who had illicit heterosexual relations, with special reference to tree-drawing expression in Koch's Baumtest (Tree-Drawing Test).

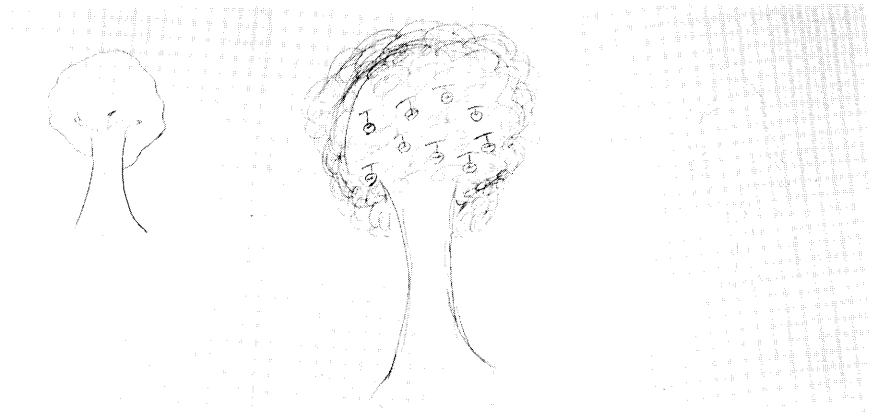
For this purpose, 60 mentally healthy girls and 52 girls who had illicit heterosexual relations were drawn. Each of these girls belonged to the second or the third year grade of junior high schools.

The tree-drawing expressional characteristics of each girl of the two groups were checked by using the Baumtest's Tabulation Sheet, which were devised by K. Hayashi et al. The frequencies of each item of this sheet were calculated and were compared between the two groups. The common items and the significantly different items were thus drawn between the two groups.

The results obtained by these procedures were discussed on the basis the developmental characteristics of the female pre-adolescents and the environmental aspects in which the girls of each of the two groups had been reared.

Finally the typical cases of the girls who had illicit heterosexual relations were cited to illustrate their personality characteristics with special reference to the tree-drawing patterns resulted from Koch's Baumtest.

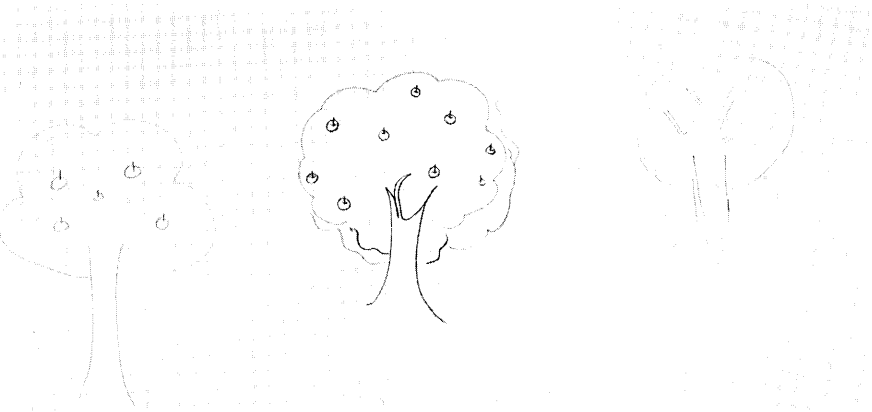
* 次頁(p. 35)以降の各バウムの下に示されている(　)内の左側と右側の数値はそれぞれ，「14項目(性>一)」での合致数（左側の数値）と「19項目（性<一)」での合致数(右側の数値)とを示している。(詳細は本論文中 p.29 の「研究Ⅱ」の方法の節を参照されたい。）以下各写真についても同様。



No. 1 (9, 0)*　　No. 2 (6, 0)　　No. 3 (8, 0)

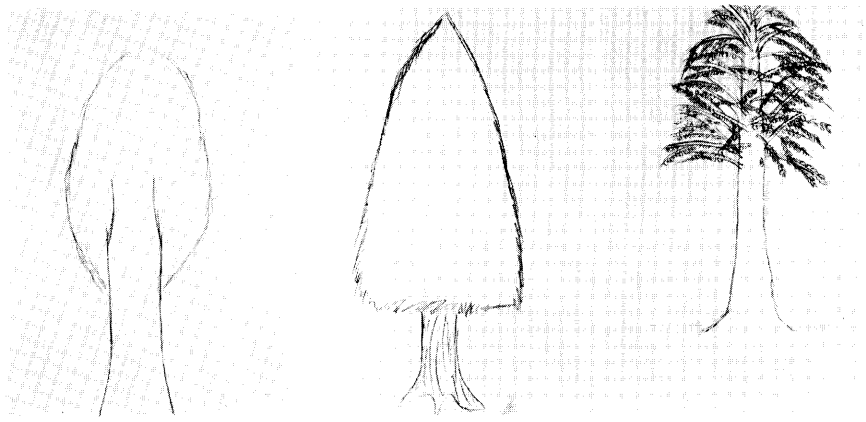


No. 4 (6, 0)　　No. 5 (7, 0)　　No. 6 (5, 0)



No. 7 (7, 0)　　No. 8 (7, 0)　　No. 9 (8, 1)

写真：性非行群のバウム



No. 10 (6, 1)　No. 11 (7, 2)　No. 12 (1, 6)

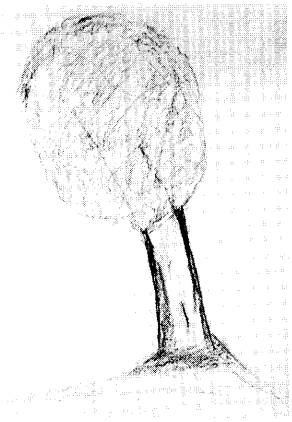


No. 13 (2, 5)　No. 14 (3, 4)　No. 15 (1, 3)



No. 16 (4, 1)　No. 17 (0, 4)　No. 18 (8, 2)

写真：性非行群のバウム（つづき）



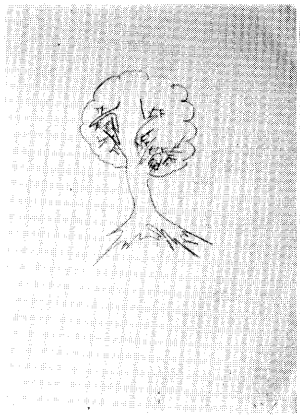
No. 19 (4, 5)



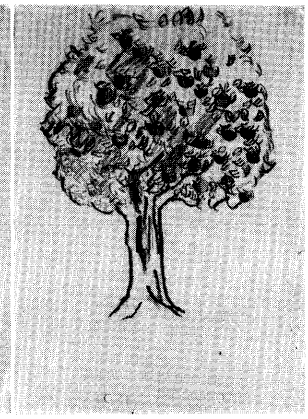
No. 20 (3, 0)



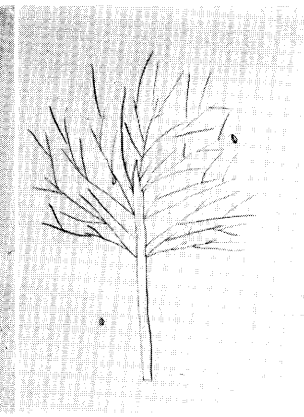
No. 21 (4, 1)



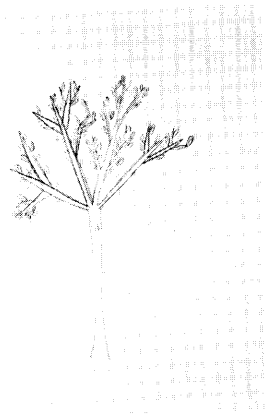
No. 22 (6, 1)



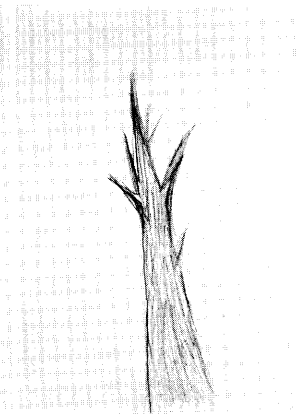
No. 23 (6, 3)



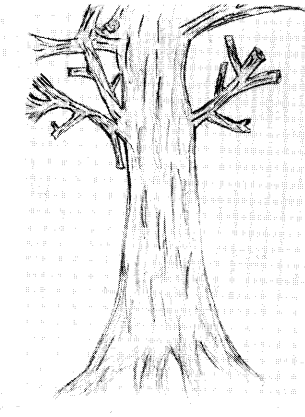
No. 24 (3, 3)



No. 25 (3, 3)

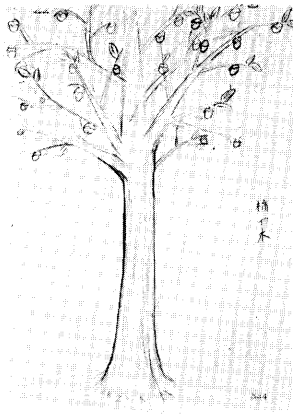


No. 26 (4, 2)

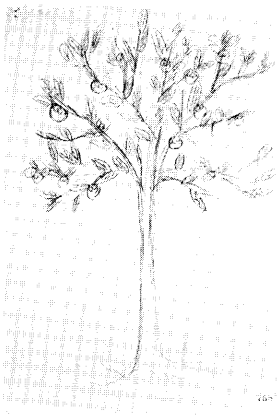


No. 27 (4, 3)

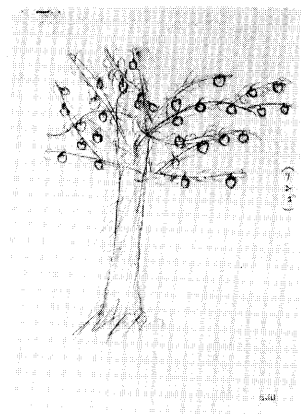
写真：性非行群のバウム（つづき）



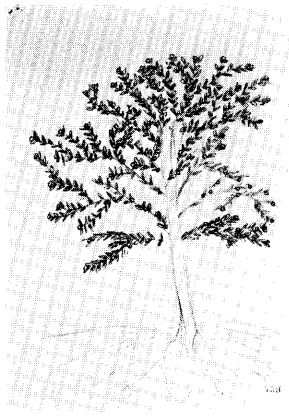
No. 1 (0, 10)



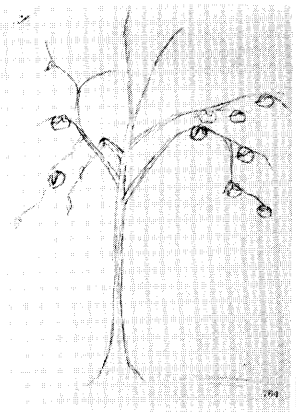
No. 2 (2, 10)



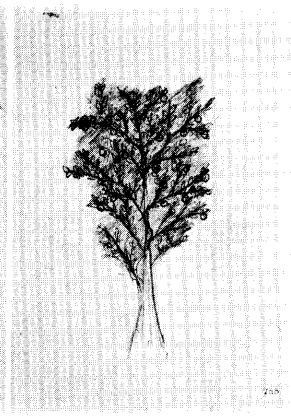
No. 3 (0, 9)



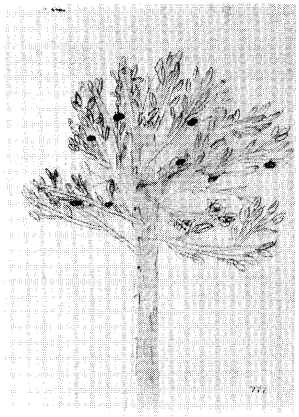
No. 4 (1, 12)



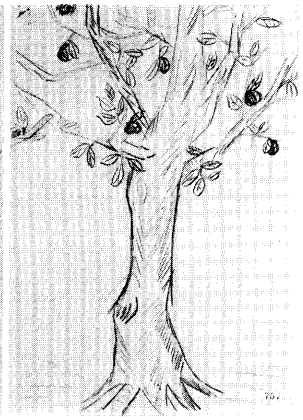
No. 5 (0, 9)



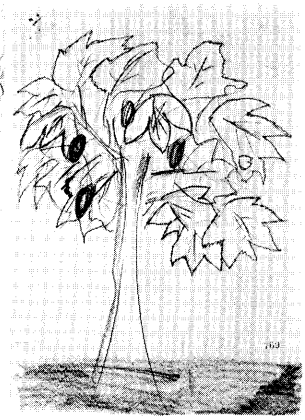
No. 6 (2, 9)



No. 7 (1, 8)

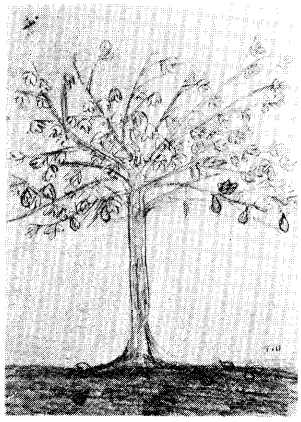


No. 8 (11, 9)



No. 9 (1, 8)

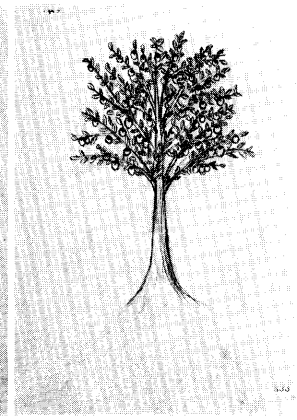
写真：一般群のバウム



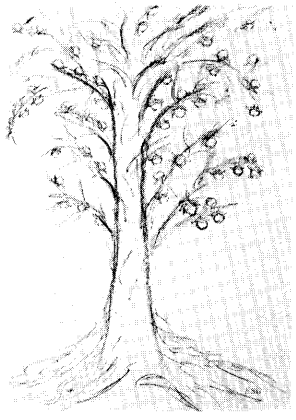
No. 10 (1, 8)



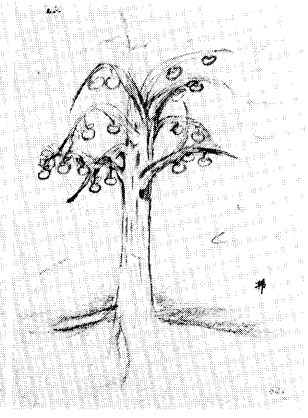
No. 11 (12, 9)



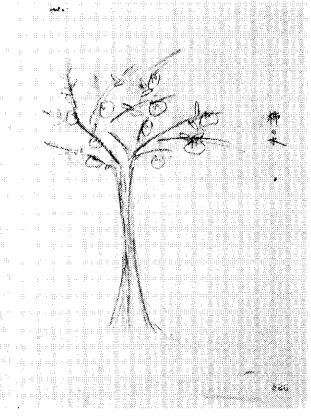
No. 12 (4, 8)



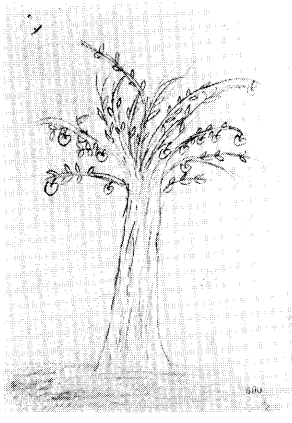
No. 13 (3, 10)



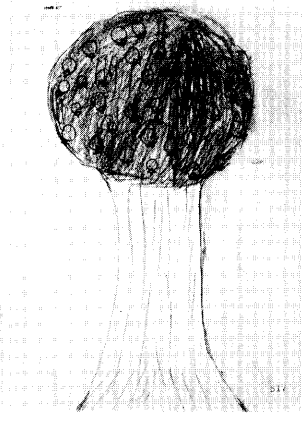
No. 14 (1, 10)



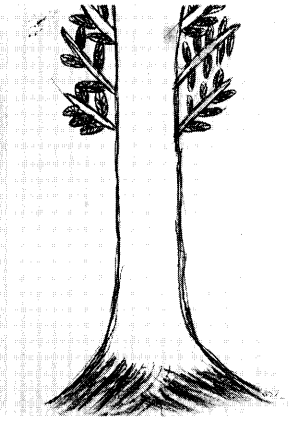
No. 15 (2, 6)



No. 16 (1, 6)



No. 17 (4, 2)



No. 18 (5, 2)

写真：一般群のバウム（つづき）